

フィランソロピーや寄付活動は、キリスト教文化に根ざして日本にはなじまない、とはよく言われる話。仏教にもそうした精神はあるとの意見はあるが、実際にお寺でどのような取り組みがなされているか、見えにくかったのも事実。しかし近年、社会に開かれたお寺の取り組みや、僧侶による社会的な活動が注目されるようになってきた。日本型フィランソロピーのあり方のヒントを得るべく、未来をつくるお寺や僧侶の真摯な実践を特集する。

◆巻頭インタビュー

仏教の価値観で
社会により影響を与えていく

一般社団法人お寺の未来代表理事

松本 紹圭 氏

PROFILE 松本 紹圭 (まつもと・しょうけい)

1979年北海道生まれ。浄土真宗本願寺派光明寺僧侶。一般社団法人お寺の未来代表理事。米日財団リーダーシッププログラムフェロー。東京大学文学部哲学科卒業。超宗派仏教徒のウェブサイト「彼岸寺」(www.higan.net)を設立し、お寺の音楽会「誰そ彼」や、お寺カフェ「神谷町オープンテラス」を運営。2010年、ロータリー財団国際親善奨学生としてインドに留学しMBA取得。2012年、若手住職向けにお寺の経営を指南する「未来の住職塾」を開講。2013年、世界経済フォーラム(ダボス会議)のYoung Global Leaderに選出される。『お寺の教科書—未来の住職塾が開く、これからのお寺の100年—』(徳間書店)など著書多数。

若手住職向けにお寺の経営塾を開講し、超宗派仏教徒のウェブサイトをやお寺カフェを企画、世界経済フォーラム（ダボス会議）のヤング・グローバル・リーダーにも選出されるなど、その活動に注目が集まっている新進気鋭の僧侶・松本紹圭さん。情報化や技術革新で進化したかのように見える人間の生き方は、実はまったく進んでいないという松本さんの、「お寺から日本を元気にする」というユニークな発想について聞いた。



お寺の未来を
経営学で紡いでいく

—松本さんは母方のご祖父様がお寺の住職をされていました。大学卒業後、僧侶の道へ進まれたのは、その影響があったのでしょうか。

松本 子どもの頃はよく寺に出入りしていたので、その影響は大きいと思います。職業としては特別意識していませんでしたが、お寺っ

ていいな、仏教っていいな、という感覚です。

そして思春期の頃にオウム真理教の事件があり、その信者から「風景に過ぎなかった」と評された伝統仏教の存在意義をあらためて問い直しました。もうちょっとお坊さんに頑張ってほしいという思いと、お寺が変わっていくことはできないのか、という問題意識ですね。

もともと仏教に限らず、さまざまな思想に興味を持って大学では哲学を学びました。卒業するとき、まわりの友人は進学や就職をするわけですが、私の頭の片隅にはなぜか「お寺」が常にありました。そして「お坊さんになる」という方法があることに気づき、その道を選びました。そこからは迷いはありませんでした。

—これだけライフスタイルが変わってきているのですから、確かにお寺そのものも変化する時代にきているのですね。そのなかで都会の真ん中にある東京神谷町光明寺の境内に、お寺カフェ「神谷町オーブンテラス」を、また超宗派仏教徒に

よるインターネット寺院「彼岸寺」を運営されています。さらに次の手法として若手住職への経営塾をスタートされた。これは実にユニークな活動ですね。

松本 もともとお寺というのは、お坊さんが生計を立てるための場所ではなく、みんなのものとして機能し、残っていくことが大事だと思っていたんです。支えてくれる檀家さんに対して、しっかりとやってい

くというのは大切ですが、社会はどんどん変わっていくのですから、お寺ももうちょっと社会に向かって開いていけるのではないかと。

それで私も光明寺というお寺を舞台にいろいろチャレンジしてきました。しかし、全国にお寺は約7万ありますから、いくら一寺院が頑張っても、そのなかでは小さな点に過ぎません。これを横に広げてスケールを出していくことが大事だと気づきました。とはいえ、



超宗派仏教徒のウェブサイト「彼岸寺」(higan.net)



未来の住職塾

のです。

実際にお寺をどういう形で引つ張っていくのかという方法論として、「経営学」に注目しました。

―それでMBA（経営学修士）を取るべく、1年間インドに留学されました。ここは純粹なビジネススクールだったので何か？

松本 そうです。ハイderabadという南インドの都市にあって、インド人の多い学校でしたが、お坊さんはもちろん宗教系の人間も私だけでした。勉強が大変で、学期末くらいしか休みもなかったのですが、妻と当時1歳の息子と家族旅行をしたのがよい思い出です。

―そして帰国後の2012年から

「未来の住職塾」をスタートされたのですね。宗派を超えて、予想以上の反響があったと聞きましたか。

松本 はい。年間5回のプログラムで、最終的には自坊の寺業計画書を発表するところまでやります。企業の人にマーケティングの話をして目新しさは感じないでしょうけど、お坊さんはそういうものに触れる機会がないので、空っぽのコップに知識を注ぐ感じで、伸びしろが大きいです。意識が変わり、自信も持ちますね。

一人ひとりを見れば、お寺の規模などの境遇はさまざまでも、こういう人たちがこれからの仏教界をつくっていくのだからなど。その可能性は大きく感じます。やはり、意識が高くて、いろいろ活動している仲間と共に学ぶことで、スタンダードが高い位置に保たれます。

―それは仏教界にかかわらず、あらゆる面でいえますね。そういう意味

では塾を通しての仲間づくりも重要です。

松本 実際、そうだと思います。今、日本には30万人の僧侶がいるといわれていますが、本当に話があり、問題意識が重なる人がどれだけいるのか。

私がもし、どこかのお寺の後を継がなければならない立場になったら、やはり大変な思いをするでしょう。お寺を改革するにしても、手がかりが見つからない。仲間もいない。

仏教では「三宝」という言葉があります。仏と法と僧が3つの宝だという意味ですが、3つ目の僧というのは僧侶の集団を指すんですね。

個々人のお坊さんを敬いましょうという意味ではなく、同じ道をとともに歩む仲間を大切にしましょうということなんです。仏教では「サンガ」といいますが、学びのコミュニティというか、磨きあう仲間の存在の重要性はとても感じますね。「未来の

私の過去の取り組みが、そのままの寺にも当てはまるものではありません。コンビニのように全国一律ではなく、それぞれのお寺にはそれぞれ物語がある。今までのものを引継ぎ、そこからお寺自身の未来の物語を紡いでいく必要があると思う



本堂前のくつろぎの空間「神谷町オープンテラス」

住職塾」を通じて生まれたコミュニティが、今後のお寺を考えるうえで灯火になってくれればいいなと思います。

お寺は必ずしも 変わらなくていい

「ただ周囲を見ると、まだまだ古い形を維持し続けるお寺の姿が目につきます。」

松本 明治以降、お寺のほとんどは

世襲で、いわば家業化してきたんですね。ただ私は世襲を必ずしも悪いこととは思っていません、小さい頃から檀家さんに「私の葬式はあなたがやるのよ」と言われて育つ。

そこに生まれることも、ひとつの大きな縁なので、自分のこととして受けとめて、「じゃあやるよ」という気持ちで固めるというやり方もあります。

ただ一つ言えるのは、私のようにお寺の跡継ぎでない者が僧侶になるルートが狭いというか、ほとんど

ないという状況では、新陳代謝が生まれにくいんですね。お寺生まれではないけれど、仏教のことをやりたい、お寺にかかわりたいという人にどんどん門戸を開くことが大切です。

もちろん、世襲だからいけないというわけではありません。単なる家業としてやっているところは退場していきましょ、どんな縁であれ、頑張っているお寺は残っていくのじゃないかな。そこに「自分こそ、やりたい」と思う人が入っていくことができる余地があると思います。

今はいるいな意味でお寺業界も苦しい時期ですが、たぶん必要な時間なのでしょう。

「お寺の淘汰が起こるといったことでしょうか。」

松本 お坊さんが淘汰されるのは構わないと思います。ただ私の願いとしては、一つでも多くの寺が残ってほしいんです。かつての私は、社会の変化に伴って、お寺も柔軟に対応していくべきだと思っていたのですが、最近、思い至ったところがあるんです。つまりお寺というの

は、必ずしも変わらなくていいのかな。そういうと誤解を受けるかもしれませんが、「次の時代までとにかく残る」ことが、お寺の存在意義の重要な部分を構成しているように思うのです。

「旧態依然でよいということではなくて？」

松本 例えば、この光明寺という場所は江戸時代の地図を見ても光明寺です。光明寺は800年の歴史があります。江戸の大火も黒船も明治維新も見てきた。一切は過ぎゆくという、人間のあり様の真実を見続けてきたんです。日々、スピードを増しながら変化していく社会のなかで、それを定点観測できる場所がお寺なのだと思います。

「確かに、諸行無常ですね。すべてのものは亡びていくことを、お寺に来るとかえって感じる事ができます。」

松本 そういうことを忘れてはいけません。私を含めて日常生

活を振り返ると、本当はもうちょっと地に足をつけてやらなければならぬことを、簡単にアウトソースしている気がします。子どもの教育もそうですし、年金とか社会保障の仕組みも手厚くなり、便利になるかも知れませんが、それは絶対のものではない。どこから湧いてくるものでもないし、だれかが与えてくれるものでもない、という前提に立たないと、この社会の方向性が失われていくような危機感があります。

みんなに根っこがないなかで、事態が進行していく。民主主義というプロセスがありながら、根っこの部分が非常に弱くなっているのかなと思うのです。

—本来、根っこは一人ひとりの暮らしのなかにあるものですね。

松本 自分が何のために生きているのか、何のために仕事をしているのかということを考えることなく、押し流されていく。そのなかで、とりあえず生活できているからいいやとか、給料が上がったからいいやと埋没していくところがあって、そこには根っこがあるようで実はないのだと思います。

—そうすると今の時代、みんなが漂流しているような状態かもしれないですね。

松本 根っこが何でできているのかと考えた時、1つは命の繋がりが

です。先祖供養も、それを確かめるひとつのカタチですね。まっさらなところに完全に自由な状態で立っている人などどこにもいない。何でも「自己責任」といわれる時代ですが、結局、本当の意味で自分だけが決めたこと、自分だけに責任があることなどなにもない。仏教で「縁起」といいますが、すべての存在は相依って成り立っています。

—そういう自分の存在を確かめる場として、お寺が変わらない姿であり続けてほしいです。同様に、古典といわれるまでに多くの人に踏み固められてきた仏教という思想が、ものごとをあらためて考えるときの定点になるとも思うのです。

仏教の価値観で 世俗に影響を与える

—松本さんのお話を伺っていると、お葬式のとぎにだけ現れて、お経を唱えてくれるお寺さんというイメージからは、かなり異なった姿が浮か

んできます。

松本 「葬式仏教」という言葉があつて、ネガティブに使われることが多いと思います。しかし私自身、お寺が葬式をやるといふのは、とても大事なことだと考えています。

人間は他人の死を通じてしか「死」に触れることはできません。肉親や親しい人の死に出会い、葬式を執り行うというのは、死に向き合う機会として、すごく重要です。その時、故人と普段から付き合いのある住職が何か話すだけで、感じるものがあると思います。

—身近な人が亡くなった時、自分の人生を振り返ったり、このままでいいのかと考えることもありますね。根っこについて考える、よい契機になると思います。

松本 皆さんは人として生きてきて、自分の生きてきた証を何かに残したい、永続性に繋がりたいという



感覚があると思います。その時、1つの定点として、お寺には墓があり、故人と関係性を持っている住職がいる。今は家族の形が崩れてきて、家そのものは永続性の物語を担えなくなってきたなかで、これからはお寺がもうちよつと積極的に、いろいろな人の永続性を受けとめる。そして記憶の伝承者という役割も担っていただけるのだと思います。

—松本さんは、たくさんの若手僧侶とかかわっておられますが、そのような役割を自覚している住職も増えていますか？

松本 お寺に生まれて、みんなから後を継いでくれと期待されるなかで、すべての住職が全員、仏教に深く興味を持つかという、向き不向きもあるでしょう。お経がへたな人がいるかもしれないが、それでもやらないといけない。やれるなりにやるうと思っっているなかで「絶対に自分の代で終わらせるわけにはいかない」という意識は高いです。

—必ず次に繋ぐのだという決意です

ね。

松本 そうですね。次へ繋ごうという意思の強さは、本当に頭が下がります。檀家さんもそういう意識があつて、「今の住職はイマイチだけど、まあ二、三代はこういうのが続いてほしい」というくらい、この時間軸で考える。最近はなかなかそこまで気長には見てくれなくなりまして、それでも寺を潰さず、必ず次に引き継ぐという部分だけでもきつちりやりぎれば、それは一人の住職として、立派な仕事をしたといつていいのではないのでしょうか。

—ただ、今後は檀家も減っていく、家のあり方も変わります。お寺がどう開いていくのかということが重要になりますね。

松本 今までは仏教寺院といいながら、実際にやっている中身は先祖教だったんです。でも、わざわざ今、お寺に来てくれる人が求めていることは先祖教ではありません。最近の若い人たちには宗教的感性があると聞きますし、私たちも宗教性を高め

ていかなければいけない。今こそ仏教としての本領を発揮するチャンスなんです。

—今、求められている宗教の役割とはなんでしょうか？

松本 これだけ経済が発達し、お金がほとんど言語のようになって世界で、宗教は娑婆の外側の価値観を持ち続ける。そのこと自体が宗教の存在意義だと思っております。

—とはいえ、経済社会の枠組みのなかにいますから、当然、私の取り回している事業も赤字ばかりでは続かない。絶対に継続するべく工夫をするわけですが、一方で根底のところにある価値観は、常にこの世界の外側でないといけないと思つています。

—娑婆の外側にいて、内側の仕組みのなかでもきちつと役割をはたす。その両方を担うということですね。

松本 そもそも出家という存在も、そういう意味合いがあるんです。一般的に出家というと、人里離れた山

奥で孤独に修行するイメージがありますが、実際はそうではありません。世俗の価値観とは別の、仏教なら、仏教の価値観で生きながら、世俗によい影響を与え続けるというのが出家です。決して世捨て人ではないんです。

—今は過渡期にあつて、これからのお寺は、大きく変わっていくと思いますよ。でもその変わっていく方向はいい方向であつてほしいと思うし、もしいい方向にいくことができれば、大きな社会の力にもなれるのではないかと思つています。

—僧侶として、また経営という視点で、お寺を客観的に見るという複眼で捉える松本さんの使命は大きいですね。

—これからの伝道師としてのご活躍を期待しています。

インタビュー

公益社団法人日本フィランソロピー協会

理事長 高橋 陽子

【2014年7月11日 東京・神谷町光明寺にて】